

歴史学研究者の資料探索の特徴を反映した検索システムの提案

ZHANG SHAOZHE

デジタル技術の進展が急速な時代において、人文学分野における文献資料のデジタル化もますます急速に進んでいる。このような状況下で、どのようにデジタル技術を有効に利用し、人文学研究者を対象にして有効な検索と資料提示機能を実現することは、デジタルヒューマニティズの視点から非常に重要な課題の一つであるとされている。

しかしながら、既存の文献システムは基本的に文献資料の収集、保存、デジタル化などの面にとどまっている。人文学研究方法と情報技術の結合により、人文学研究者が自分の問題意識に合致した文献資料を見つけることは困難であると指摘されている。さらに、人文学研究者が予想外の学術問題を掘り起こし、新たな研究の視点を発見するプロセスを促進することができないと言える。そのため、既存の文献システムは有効な検索と資料提示機能を提供するのに不十分であり、方法論的に人文学研究を支援するためには改善が必要であると考えられる。

そこで本研究は、CiNii Research、Omeka、Web of Science など既存のデータベースや検索システムの現状と問題を分析し、本研究システムの構築に方向を示した。さらに、デジタルヒューマニティズの視点から、歴史学研究者が資料を探索する際の特徴を分析し、歴史学研究における検索システムに必要とされる機能を特定した。

具体的に、日本における三国志を中心とした歴史学研究論文を分析するとともに、哲学、文学、民俗学、自然科学などの分野の研究論文も対象とした。結果として、歴史学研究が他の人文学と異なる点は、哲学的思考や文学的手法をあまり用いない点であり、様々な種類の資料を用いて過去の事象や社会を正確に理解することを目指す点であることが示された。また、歴史学研究においては、文化や歴史的背景を考慮した文献の探索や先行研究の参考、地理的な位置の考慮、複数の文献を参照しながら論点を設定することが重要であることが示されている。これらの視点を考慮した資料探索により、よりの確な研究を行うことができると考えられる。そのため、歴史学研究者が求める検索システムは、歴史的背景や文脈を考慮した検索結果を提供することが期待される。また、歴史的な時系列や地域の特徴を考慮した検索結果を提供することも重要である。

今後の課題として、研究者とのインタビューを通じて、モデリング言語である IDEF0 に基づいて歴史学研究における資料探索行動を類型化し、それに寄り添った資料探索システムのモデルを提案することを目指す。その後、歴史学オントロジーを構築して資料探索機能を備えたシステムを実装し、提案したシステムモデルの実現可能性と有用性を評価する。

(指導教員 宇陀 則彦)